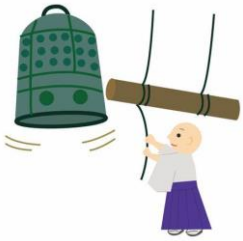
めざせ！南十字星

笑顔があふれ、しあわせを感じられる学校

学 校 便 り
令和６年１２月号
ヨハネスブルグ日本人学校

令和６年度２学期　最後の月、師走となりました！



今年も残すところあとわずかとなり、学校でも２学期の締めくくりが近づいています。この１年、子どもたちは多くの活動を通じてそれぞれの目標に向かい一生懸命に取り組んできました。学習や活動を通じて日々成長しており、その様子を見守れることを嬉しく思います。暑さも日増しに厳しくなりつつありますが、残りの学校生活をさらに充実させていきたいと考えています。夏休みには、ご家族との時間を大切にしながら、新しい年に向けて次の目標を立てられるよう願っています。

さて、先日の全校朝会で、「ひび割れ壺(ひびわれつぼ)」の話をしました。この話は、機会を捉えて子供たちに繰り返し、読み聞かせています。僭越ですが、その講話の内容とともにご紹介いたします。

まず、その人らしさとは？

人には誰でも得意なこと、苦手なことがあります。学校では、みなさん、先生方が学習や生活を通して、お互いの良いところや頑張りを認め合い、励まし合いながら一日一日を過ごしています。大人も同じです。

私たちが住むこの国らしさとは？

私たちは、今　南アフリカという国に住んでいます。日本から見れば、外国に住んでいるわけですが、この国には素晴らしいものがたくさんあります。日本と違うよさは何でしょうか。また、皆さんも学習している通り、かつてアパルトヘイトが行われていたことからも人のもつ権利について、私たちに学べば学ぶほどいろいろなことを考えさせ教えてくれています。

南アに住みながら、自分の将来に生きる貴重な経験を積んでいるわけです。

自分らしさとは？

皆さんは、自分の良いところはどこだと思っていますか。自分の考えと周りの人が認めてくれることは、結構ちがうことが多いと私は思っています。また、誰一人完璧な人はいません。人それぞれちがいお互いを認め合って生活しています。

「ひび割れ壺」の話

インドに伝わる昔話です。

ある水汲み職人は、二つの壺を持っていました。

天秤棒の端にそれぞれの壺をさげ、首の後ろで天秤棒を左右にかけて、彼は水を運びます。

その壺のひとつにはひびが入っています。もうひとつの完璧な壺が小川からご主人様の家まで一滴の水もこぼさないのに、ひび割れ壺は職人が水をいっぱい入れてくれても、ご主人様の家に着く頃には半分になっているのです。

完璧な壺は、いつも自分を誇りに思っていました。なぜなら、彼が作られたその本来の目的、水をくむことをいつも達成することができたから。

ひび割れ壺は、いつも自分を恥じていました。なぜなら、彼が作られたその本来の目的を、彼は半分しか達成することができなかったから。

２年が過ぎ、すっかり惨めになっていたひび割れ壺は、ある日、川のほとりで水汲み職人に話しかけました。

（つぼ）「私は自分が恥ずかしい。そして、あなたにすまないと思っている」
（職人）「なぜ、そんなふうに思うの？」　水汲み職人はたずねました。
（職人）「何を恥じているの？」
（つぼ）「この2年間、私はこのひびのせいで、あなたのご主人様の家まで水を半分しか運べなかった。　水がこぼれてしまうから、あなたがどんなに努力をしてもそれが報われることがない。私はそれがつらいんだ」と、壺は言いました。

水汲み職人は、ひび割れ壺を気の毒に思い、そして言いました。
（職人）「これからご主人様の家に帰る途中、道端に咲いている、きれいな花を見てごらん」

天秤棒にぶら下げられて、丘を登っていくとき、ひび割れ壺は、お日様に照らされ美しく咲き誇る道端の花に気づきました。花は本当に美しく、壺はちょっと元気になった気がしましたが、ご主人様の家に着く頃には、また水を半分漏らしてしまった自分を恥じて、水汲み職人に謝りました。

すると彼は言ったのです。

「道端の花に気づいたかい？花が君の側にしか咲いていないのに、気づいたかい？
ぼくは君からこぼれ落ちる水に気づいて、君が通る側に花の種をまいたんだ。そして、きみは毎日、ぼくたちが小川から帰る途中、水をまいてくれた。
この2年間、ぼくは、ご主人様の食卓に花を欠かしたことがない。君があるがままの君じゃなかったら、ご主人様は、この美しい花で家を飾ることはできなかったんだよ」

（作者不詳　菅原　裕子訳）